

幼稚園における英語活動『English Time』のカリキュラムに関する考察 — 保護者へのアンケートをもとに —

“English Time” Curriculum at Kindergartens

池 中 雅 美*

要旨

筆者は、2000年度から関わってきた幼稚園における英語活動『English Time』の2年間のカリキュラムを継続して検討してきた。2009年度2月に、保護者へのアンケートを実施した。子どもたちが『English Time』に関して、家庭でどのようなことを話しているのかを探り、その結果をカリキュラム構築に役立てたいと考えた。アンケートから得た結果、および英語活動の問題点を明確にし、今後のカリキュラム構築を再考する。

1. はじめに

本学の幼稚園、2園において英語活動『English Time』を2000年度から行ってきた。2002年度から2007年度までは希望者のみの参加となり、他の園児たちが下校したあと、希望する園児たちが残り、英語活動を実施していた。2008年度からは保育時間のなかでの実施となり、現在にいたっている。

この間、年中、年長を対象とする2年間の英語活動のカリキュラムの構築を試みてきた。始めは年中、年長と同じ内容で実施していた時期もあったが、発達段階などを考え、2年間のカリキュラムを作成することを目標とし、試行錯誤を繰り返している。

昨年度、家庭においてどれだけ子どもたちが『English Time』のことを話題にしているか、どういった内容が子どもたちの記憶に残っているのかを調査するために、保護者へのアンケートを実施した。このアンケート結果を参考に、幼稚園における2年間（年中、年長）の『English Time』のカリキュラム構築を再考した。

2. 先行研究

大学の教員がその大学の附属幼稚園の英語活動に関わり、研究しているケースが多く見られる。また、保護者へのアンケートを実施し、その結果を実践に反映している研究報告もある。ここでは保護者へのアンケートを実施した研究報告を主に概観する。

名須川他（2008）では、兵庫教育大学附属幼稚園における、大学教員の教育活動の開発研究、実践について述べられている。平成17年度は5歳児を対象として、1回20分の活動を5回、12月に30分の特別活動を実施し、その後、1年間で13回実施、クラス別、同じ内容での英語活動を行っている。英語の時間だけでなく、日々の保育の中でもCDを流すなど、全体での取り組みを行なうことを通して、より英語への親しみがでる、子どもたちが自然と口ずさむようになるなどの効果が挙げられている。また、保護者へのアンケートからは、幼稚園での英語教育に肯定的な意見が多数を占めたことが示されている。

寺尾他（2010）においては、幼稚園教員の学びをインタビュー調査から得、記述されている。保護者へのアンケートからは、保護者からみた園児の学びの調査が行われており、英語に興味を持つようになり、新しいものを学ぼうという積極的な態度も身についたという結果が報告されている。

* IKENAKA, Masami
北陸学院大学短期大学部 コミュニティ文化学科
英語

そして、英語教育ではなく、あくまで幼稚園での保育一貫として遊びの中で自然に英語に触れてほしいという考えのもと、「英語活動」を計画したと、幼稚園における英語活動の位置づけを明確にしている。また、鈴木正敏(2007)は、多文化理解の側面を加えることが大切であると指摘している。英語活動を一つの区切られたものと捉えるのではなく、園生活全体の中で一貫した教育方針のもとで行なわれるべきものと述べている。

中山他(2009)は、つくば国際短期大学付属幼稚園において、平成13年から実施し、1週間に1回、15分～25分の英語活動を行っている。保護者へのアンケートを実施しており、「子どもが英語を理解し覚えるということではなく、英語を楽しく面白く感じながら、英語の響きや英語に親しみを感じてくれればよい」というのが保護者の意見だと述べている。今後の課題として、いかにしてすべての子どもに(一クラス約30人)英語活動を楽しませるかということ、園の年間行事や保育を取り入れ、園の教育活動と連携させ、活発な授業をどうすすめていくかということを挙げている。

福士他(2009)は青森県内のすべての幼稚園、保育所を対象として英語活動の現状を調査している。保育カリキュラムの中での英語活動の意義、位置づけの明確化、年齢に応じた指導法、教材の開発などの必要性を指摘している。

上野(2007、2008、2009)は、カリキュラムの検討を継続的に行なっている。文京学院大学文京幼稚園においては、年少から年長までを対象とし、回数、時間は年齢に応じて異なっている。特に、英語活動以外にも保育内容に連動し、旅行、運動会などへの参加を試みている。そして、カリキュラムに柔軟性を持たせることが必要であると結論づけている。つまり、それぞれの年齢にあった活動、教材を取り入れ、年齢、発達段階、知的好奇心と興味、保育室環境、子どもの人数、日案、月案、年案の計画と実践と到達目標などを考える必要があるとしている。

3. 保護者へのアンケート結果

2010年2月に、筆者が『English Time』を行なっている2園の保護者を対象としてアンケート調査

を行った。アンケートの目的は、子どもにとってどのような内容や方法が記憶に残っているのかを調査し、保護者からの目線とはなるが、子どもの興味、関心を把握し、カリキュラム構築に役立てたいと考えたからである。また、保護者が『English Time』をどのように評価しているのかを調査するためである。

A幼稚園の回収率は、年中85%、年長は64.2%であった。B幼稚園の回収率は、年中86.6%、年長は81.2%であった。両園とも高い回収率を得ることができた。A幼稚園の年長の保護者からの回収率が低かったことの原因の一つには、アンケートを実施した時期が2月であったため、年長児が卒園を控えており、それほど関心がアンケートには向けられなかったためではないかと推測する。しかし、他からの回収率が高いことから、保護者の英語活動への関心は高いといえる。

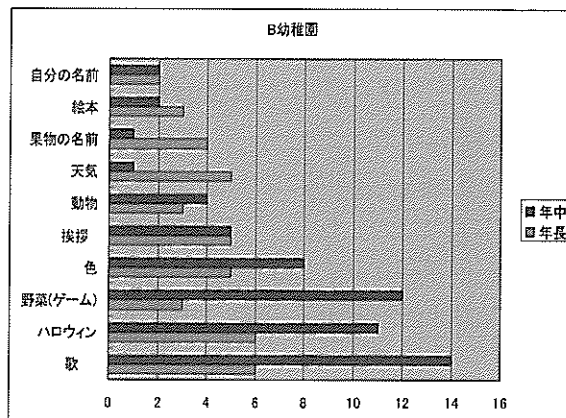
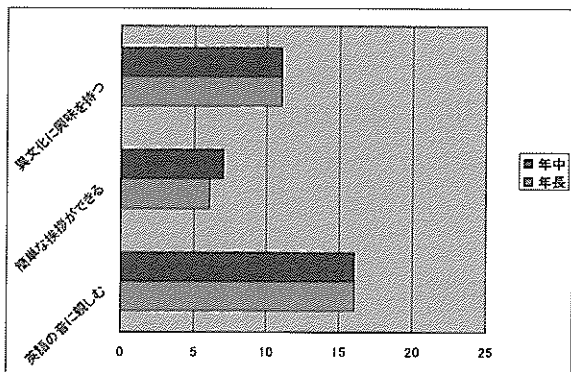
3.1 質問1に関して

まず、質問1「幼稚園でのEnglish Timeの時間に何を期待しますか?」という問いに3つの選択肢と自由記述ができる欄を設けている。「英語の音に親しむ」、「異文化に興味を持つ」に印をつけた保護者が多く、それに比べて「簡単な挨拶ができる」という選択肢に印をつけた保護者は少なかった。このことから、保護者が求めていることは、英語をしっかりと学習し、何かが出来るようになるということよりは、英語に興味を持たせ、英語という言葉、また音に、そして異文化に「触れさせたい」ということであろうと推測できる。先行研究にも見られるように、英語の音に親しむこと、楽しく活動ができることが幼稚園の段階では望まれていると言える。

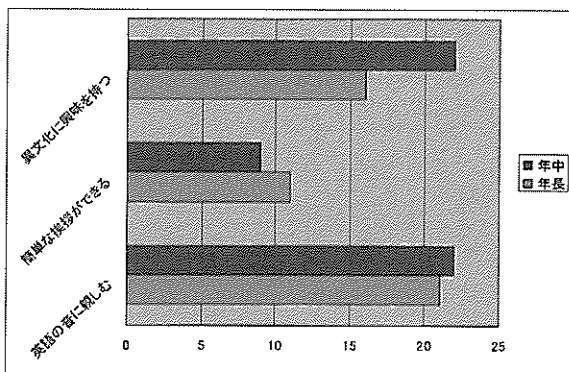
自由記述では、「たとえば外などで時間を取り、英語で親しむこともよいのでは」という意見や「イメージンとしてのクラスを希望する」、「小学校で始まる英語授業準備」、「できればフォニックスを」という意見も見られた。保護者間に、英語教育、学習に対する熱意の差が現れていると感じた。

以下は、A幼稚園とB幼稚園における質問1のアンケート結果をグラフにしたものである。

A 幼稚園



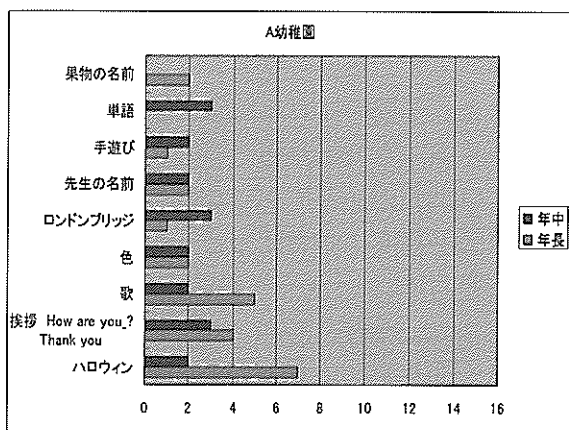
B 幼稚園



3.2 質問2に関して

質問2「English Time の話を家でお子さんが話したことはありましたか?」という問いに「はい」と答えた保護者がほとんどで、子どもたちにとって『English Time』での活動はしっかりと記憶に残るものになっていると感じた。その中で、どのような内容が子どもたちの記憶に残り、保護者にどのように話しているかを分析する。

以下に、保護者へのアンケートで記載されている話題・トピックの回数を数え、グラフにした。1回のみ記載についてはグラフに反映していない。



グラフからわかるように、子どもが親に話をしている一番多いトピックは、ハロウィンの行事である。これは、10月はじめから3回の予定で、語彙の導入と絵本を通して、ハロウィンとはどのような行事かを紹介している。当日は、trick or treat と言ってお菓子をもらいに行くという活動をしている。また、その時のために、『English Time』以外の時間を使って、子どもたちにかぼちゃのお面に自由に顔の絵を描かせ、当日はそれぞれのお面をつけて trick or treat にでかけるということにしている。第一にお菓子をもらうこと、そしてお面をつけるなど、いつもとは違う活動が記憶に残りやすくなっていると考えられる。

ただ、年長児の保護者で、1年目も2年目も同じかぼちゃのお面づくりでは、2年目は子どもの興味が薄れたのではという意見が記述されていた。年中、年長とハロウィンの時には合同で行なうことも数回あり、同じ内容で実施してきたが、発達段階を考えると、そして変化をつけるという観点から、年長となる2年目には何か別の活動を検討する必要があると感じた。

語彙や表現に関しては、色、野菜、果物、動物、挨拶、天気表現などが多く記載されている。How are you? や How's the weather? It's sunny (cloudy, etc.) という表現は、毎回のクラスのはじめに繰り返し行なっていることから、定着が図れたと考える。また、野菜の単語を多く保護者に伝えているのは、アンケートをとった時期が学年末だったということで、『English Time』での活動内容も、終わりのほうに行なった野菜の語彙を使った活動が記憶に新しいということもあるのではないかと考える。また、野菜のパズルを作成し

て年長のクラスで実施したが、そのことについての記述も見られた。歌、手遊びといった活動だけではなく、ゲームのような活動が年長のクラスではうまく機能したと感じた。

記載が多かったものに歌がある。このほか、絵本、手遊びなども挙げられている。「家で歌を歌ってくれる」、あるいは「鼻歌のように歌っている」など、英語活動で覚えた歌を、子どもたちが家庭で歌っている様子が自由記載から知ることができた。歌はメロディがあり、またリズムもあるため、非常に覚えやすい。歌にジェスチャーや手遊びを加えて歌うことには効果があると再確認した。

絵本は、『Hungry Caterpillar』、『Five Little Monkeys』、『Brown Bear, Brown Bear, What do you see?』、『Excuse Me』に関する記載が見られた。このほか、「ちょうちょは butterfly というんだよと教えてくれた」という記載があったことから『A Beautiful Butterfly』の絵本のことを話していたと思われる。導入したほとんどの絵本についての記載が見られたことは、絵本に対する関心が高いことがうかがえる。

手遊びとしては、『Itsy Bitsy Spider』、『Five Little Monkeys』の手遊びなどを取り入れた。保護者からの記載には手遊びとのみ書かれていることがほとんどで、どの手遊びが印象に残ったのかははっきりとわからないが、手遊びという方法も記憶に残りやすいということを確認できた。

教員についての記載も見られた。「〇〇先生が好き!」、「外国人の先生の話をつまみにします。」という記述のほか、「町で外国人にあってもびっくりしなかった」という記載もあり、異文化に触れるという面からの英語活動の目的が達せられていると感じた。

また、発音に関しては、以下のような記述があり、文字を導入せずリスニングのみの方法での効果がみられたと言える。

- ・親に発音が違うよと教えてくれたり…
- ・かなりネイティブな発音で私に教えてくれました。
- ・こちらが発音すると違うとって何度も発音を直されました。
- ・むらさきの発音がパープルでなく、パーポーでびっくりしました。たまねぎもオニオンではな

く、アニオンと発音がよいので…

上記以外にも、母親に単語の意味を聞いたり、英会話の相手を保護者にさせたりと、英語活動で行なったことを、家庭で話したり練習したりしている子どもたちが多いということが実感できた。

3.3 質問3に関して

最後に質問3「1年間あるいは2年間を終えて、英語への関心が高まったと思われますか?」という問いには、「思う」と回答している保護者は、A 幼稚園は 65.5%、B 幼稚園は 74.5%となっている。「思わない」と回答した保護者は、A 幼稚園は 0名、B 幼稚園で 1名(年長)となっており、「どちらともいえない」と回答した保護者は、A 幼稚園が 33.5%、B 幼稚園は 21%であった。

『English Time』の活動が全体的には肯定的に捉えられているといえる。「思わない」という回答がほとんどなかったが、「どちらともいえない」という回答が少し多かった。これには以下の理由が考えられる。

今の時代、幼稚園における英語活動の時間のみではなく、家庭でさまざまな教材を通して英語に触れていたり、あるいは幼稚園外で英語教室に通っている子どもが少なくない。そのような環境の中で子どもが英語に関心を持ったとしても、何が一番影響力を与えたのかということは特定しがたいことである。『English Time』での活動を通してさらに動機付けがされるよう『English Time』のあり方を継続して検討していく必要があると思う。

4. 『English Time』のカリキュラムについて

幼稚園における『English Time』のカリキュラムを継続して検討してきたが、なかなか固定させることができず、毎回のプランを変更しながら行ってきた。年間の流れとして、題材・トピックや導入する表現などは決めているが、細かな指導案としては調整が必要であった。上野(2008)は「カリキュラムを確実に遂行することが、決して先行されてはならない」と述べている。筆者も同様に、カリキュラムは柔軟に対応することが大切であると考え、年間の流れを計画しつつ、1回のクラスを終えたあと、次のクラスのために調整をした

指導案で実施したり、時には子どもの興味、関心に応じて別の活動を取り入れるなど、幼稚園における英語活動の意義を確認しながら、柔軟に対応することが大切であると考え。

その年、その年で子どもの集団がかわり、興味、関心もその年、それぞれの年齢によって異なっている。去年は上手くいったが今年はあまりうまくいかないということもある。今回のアンケートを通して、子どもたちの記憶に英語活動で行なってきたことが多く残っていること、そして家庭で話している様子がわかった。これらを参考に、今後の英語活動の内容の模索を継続して行うことが必要であろう。

幼稚園の英語活動のカリキュラムを考える上で必要だと思うことは、『English Time』の位置づけである。園児が全員そろって、保育の時間内に英語活動が実施されるということだけでは、幼稚園のカリキュラムの中に英語活動が位置づけられているとはいえない。保育内容と連動できる活動はないだろうか、普段子どもたちが好きな絵本を英語で読んでみることはできないか、幼稚園の行事にあわせて何か導入できることはないかなど、自然と、子どもたちの生活と英語を結びつけることが可能にはならないかと考えていくべきだと感じている。日ごろから子どもたちを観察し、子どもたちと英語活動を担当する教員が共通の活動を行うことを通して、子どもたちの興味、関心を把握した上で、それを生かした英語活動が可能になるのではないかと考える。

5. 今後の課題

今後に向けての課題として、第1に、保育内容との連動がどれだけ可能になるか、第2に、柔軟に対応するために、どのような体制をとっておかなければならないか。第3に、現在は年少を対象とせず、年中、年長で英語活動を実施しているが、年少から始めることの効果は考えられないかということを経験していき、今後検討していくことが必要ではないかと考える。

第1の保育内容との連動については、それぞれの幼稚園の教育方針を理解した上で、何が可能であるかを検討する必要がある。幼稚園教育要領の第2章、ねらい及び内容においては、5領域のね

らいに基づいた具体的な内容が記載されている。そのうち、言葉と人間関係の内容をここでは取り上げたい。

言葉

経験したことや考えたことを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。

英語活動『English Time』は、言葉への興味、関心を引き出すことができるものであると考える。母語だけではなく、英語という外国語を使って自分を表現し、相手に伝えられたという喜びを感じることができる活動であると思っている。また、人間関係については以下のように示されている。

人間関係

他の人々と親しみ、支えあって生活するために、自立心を育て、人とかかわる力を養う。

人とかかわる力は、様々な経験を通して身につけられるものであると考えている。他者の存在を認識し、自分と異なる他者を受け入れること、また自分自身を受け入れることによって、人とのかかわり方を学んでいくことになると思う。この時期に異文化・異言語に触れることにより、幼稚園での英語活動は、まったく異なる他者を受け入れるという姿勢の素地を作ることにつながると考える。それゆえ、保育内容との連動を検討する必要がある、幼稚園のカリキュラムの中に英語活動が組み込まれるべきだと考える。

第2に挙げた、柔軟に対応するための体制という点については、外国人と日本人のチームティーチングで指導を行なっているので、打ち合わせをしっかりとすることが大切だと考える。また、子どもたちの普段の様子を把握している幼稚園教諭との連携も、普段から密に取っておく必要があると考える。指導内容は、児童英語関連の出版物で取り上げているトピックから選んでいるが、今後はどのような提示の仕方、どのように活動させるかという方法論に目を向ける必要があると考える。幼稚園教諭、外国人指導者、日本人

指導者の連携を土台に、より効果的な方法、提示の仕方を検討し、年齢に応じた内容、方法で指導案を作成、検討する必要がある。

年少を英語活動の対象とするかどうかについても検討が必要である。以前筆者が実施した石川県内の幼稚園を対象としたアンケートは、回収率は61%であったが、その約4割が年少から英語活動を実施していることがわかっている。母語の習得を優先させるべきという意見もあるだろうが、幼稚園での英語活動の意義、またその効果を研究した上で年少も対象とする決定をしなければならない。

6. まとめ

今回保護者へのアンケートを実施し、『English Time』で行なってきた活動内容を見直すことができた。子どもたちが家庭で話していることのみでなく、保護者からの提案など、今後に向けての指導案作成に役立つ情報を得ることができた。

今後、小学校での英語が必修化されることを考えると、さらに幼稚園、保育園での英語活動をその準備として期待する保護者が増えることも予想される。しかし、英語活動を幼稚園で行う目的は、英語という異言語に触れるという体験を通して、英語の音に慣れる、親しむということ、また、異文化を知ることにより、異なったことや自分とは異なった人を排除するのではなく、ありのまま受け入れるという姿勢を身につけることの2つであると考えている。そのためには、楽しく活動を行うことが必須であり、英語が嫌いだという子どもをつくらないということを心がけなければならないと思っている。

幸いにも『English Time』の時間が待ち遠しいと思ってくれている子どもたちが多くいることがアンケートの自由記述からわかっている。「English Timeの日だよと声をかけると、ヤッターと、とても喜んで登校していきました。」という記述や、「毎回楽しみにしています。」「イングリッシュタイムが大好きで、毎回のように話をしてくれました。」という記述もあった。

保護者へのアンケートは今回初めて実施したが、より頻繁に実施することで、子どもたちの興味、関心を知り、子どもたちの記憶に残ることが何かを把握し、すばやく『English Time』の

活動内容に反映させていくことができるのではないと思う。また、幼稚園の保育者からの、英語活動に対するフィードバックも、今後の英語活動『English Time』のカリキュラムを検討する上で、有益なものとなると考える。

幼稚園という時期の、子どもたちの成長を考え、『English Time』のカリキュラムの検討を続けていかなければならないと考える。

<参考文献>

- 1) 安達 励人 2006 「倉敷市内の幼稚園英語活動の実態調査 -幼稚園・保育園の園長を対象に-」 倉敷市立短期大学研究紀要 44 21～28
- 2) アレン玉井光江、上野 めぐみ 2000 「幼児英語教育について」 文京女子大学研究紀要第2巻第1号 177～193
- 3) 上野 めぐみ 2007 「カリキュラム考Ⅰ 幼稚園における英語活動の意義 -生きる力・学ぶ力とは-」 文京学院大学外国語学部文京学院短期大学紀要 (6) 121～135
- 4) 上野 めぐみ 2008 「カリキュラム考Ⅱ 幼稚園における英語活動を通して」 文京学院大学外国語学部文京学院短期大学紀要 (7) 359～374
- 5) 上野 めぐみ 2009 「カリキュラム考Ⅲ 幼稚園における英語活動を通して 年長児の活動1-1」 文京学院大学外国語学部文京学院短期大学紀要 (8) 275～292
- 6) 寺尾 裕子、鈴木 正敏、高橋 美由紀、名須川 知子、谷石 宏子 2007 「プロジェクトとしての附属幼稚園での英語活動の実践」 学校教育学研究 第19巻 97～107
- 7) 寺尾 裕子、鈴木 正敏、名須川 知子、高橋 美由紀 2010 「幼稚園での英語活動の試みによる園児の学びと教員の学び -保護者と教員への調査に基づいて-」 学校教育学研究 第22巻 1～12
- 8) 中山 千章、廣瀬 久子 2009 「附属幼稚園の英語指導における保護者の意識調査と考察」 つくば国際短期大学紀要 37 63～80
- 9) 名須川 知子、高橋 美由紀、岸本 美保子、白石 隆、寺尾裕子 2008 「幼稚園における特色ある教育内容活動の開発に関する研究 -5歳児「英語で遊ぼう」の実践から- 幼年児童教育研究 第20号 47～53
- 10) 福士 洋子、成田 恵子、坂本 明裕 2009 「保育現場における英語活動の実態調査 -青森県の全幼稚園・保育所を対象に-」 青森明の星短期大学研究紀要 (35) 47～66
- 11) 文京学院大学文京幼稚園 2001 「より良い英語教育に向けての取り組みⅡ -3歳児への英語教育を始めるに至るまで-」 文京学院大学研究紀要 第3巻 No.1 101～140

